

シリーズ

新・農業人

えづらファーム

江面 暁人 さん

えづらファーム

「人が集まる農場」めざし
農業の豊かさを発信する
交流人口は地域人口に並ぶ

えづらファーム

所在地 ●北海道遠軽町

就農年 ●2012年

経営内容 ●畑作42.8^{ヘクタール} (小麦、甜菜^{てんさい}、ジャガイモ、スイートコーン、ブロッコリー)、農泊事業など

従業員 ●常時雇用1人、住み込みボランティア年間約70人(コロナ禍20人)

URL ●<https://www.ezurafarm.com>



収穫期を迎えたブロッコリー畑の前で、妻の陽子さんと

北海道で夢をかなえる

北海道遠軽町白滝。旭川市内から約100^{キロメートル}離れた人口600人弱の地域に、えづらファームはある。決してアクセスが良いとは言いがたい場所だが、世界中から年間数百人が訪れる、「人が集まる農場」だ。

江面暁人さん(42歳)は、この地に移住して12年目になる畑作農家で、都内の一般企業に約6年間勤めたあと農業の世界に飛び込んだ。その客観的な目線で、農業や農村は単に食料を生産するためのものではなく、人の心や生活を豊かにする文化的価値を大いに含んだものであると考える。そんな独自の発想からさまざまな取り組みをおこない、多くの交流人口を生んでいるのだ。

「農業者自身にとっては、農業があまりに身近なため、その価値に気づきにくいかもしれないが、たくさんの魅力があると思う。その素晴らしさを多くの人に知ってほしい」という江面さんの経営を紹介したい。

江面さんは1979年、和歌山県の生まれ。父が転勤族だった関係で、沖縄県、熊本県、山形県など

各地に移り住んだ。そして中学、高校の多感な時期を過ごした場所が、北海道。手つかずの雄大な自然に魅力を感じ、いつかまたこの地に戻ってきたい、と思ったという。

大学進学を機に上京し、国際文化論を専攻してドイツに留学するなど見聞を広めた。卒業後は、人材系大手企業に入社。当時、会社はスピード上場を果たし、業績も右肩上がり成長していた。江面さんは企画営業職として仕事に明け暮れた。

裁量が大きくやりがいがあったものの、江面さんは次第に、この生活の「持続可能性」に疑問を持ちはじめた。きっかけは、同僚に「最近生まれた子どもから、『週末だけ家におじちゃん』だと思われている」という話を聞いたこと。自分も結婚して子どもができれば、そうなるかもしれないか。それは、自分の送りたい人生なのだろうか――。

家族との時間もつくれる職業に就きたいと考えはじめたとき、それまでは老後になんかえたいと思っていた「北海道で農業をする」という夢を、いま実現すべきではと想ったという。当時交際中だった妻・陽子さん(41歳)に相談すると、陽子

さんも移住に賛成してくれた。

短期の農業体験に通うなど本格的に準備を進めるうち、陽子さんの知人のおかげで、北見市内で畑作を法人経営している研修先が見つかった。そして2009年3月、二人はなんと結婚式を挙げた翌日に北海道へ引っ越したのだった。

農業へのイメージが一変

江面さん夫婦は、移住と同時にブログ「ファーマー日記」を開設し、独立後も更新を続けてきた。そのブログには、研修当時の二人の奮闘ぶりが赤裸々につづられている。トラクターが転落しそうになったり、土壌成分不足で生育不良になったり、全身筋肉痛になりながら雑草や石を除去したり……。さぞ大変だったのではと思ったが、江面さんにはつらかった記憶は全然ないという。むしろ、農業のイメージが良い方へ変わったというのだ。

体を動かして日が沈むまで働く。夜はぐっすり寝て回復し、また翌朝、日の出とともに気分新たに働きはじめる。終電まで働いたり、ノルマに追われたり、仕事での重責にストレスを感じたりといった都会でのサラリーマン生活を経て移住した江面さんにとって、こういっ

た「人間らしい」生活、他者の意思ではなく自分の意思で仕事ができる環境が目新しく、また性に合っていると感じたという。

研修の傍ら、独立に向けた準備も進めていた。当時から毎日つけていた作業日誌は、今でもたびたび見返し、作業の見通しを立てるうえで大いに役立っている。農場選定については、根気強く探し続けたところ、研修1年目の終わり、ローカル雑誌に道内で畑作就農した人が紹介されているのを見つけた。すかさず連絡を取り、会いに行くと、ちょうど経営継承を検討している近隣農家を紹介してくれ、2年間の研修を経て事業資産を買い受けることを条件に、トントン拍子で話がまとまった。

こうして、計3年間の研修を経て、江面さんは晴れて独立。遠軽町で経営を開始したのだった。

農場を交流の拠点に

現在は小麦18畝、てんさい10畝、ジャガイモ7畝、スイートコーン7畝、ブロッコリー0.8畝を生産している。近隣農家で大型機械を融通し合い、できた作物はJAや食品メーカーへ出荷するほか、インターネットで直販もおこなっている。



東京から家族連れが収穫体験に来ていた(写真左奥)

農産物生産を経営の土台としつつ、文化的価値を広げるための取り組みとして特徴的なのが住み込みボランティアだ。

入口は人材確保のためだった。独立1年目、地元の人をパート従業員として雇用したが、ほ場は最寄りのコンビニまで車で30分かかるとような立地であることから、通いの従業員を継続的に雇用するに

は限界があると実感。そこで発想を転換し、寝泊りできる場所と採れたて野菜たっぷりの食事3食を提供し、長期滞在しながら農作業をしてもらう、住み込みボランティアの募集を始めたのだ。

最初は知り合いのつてを頼りながらではあったが、さまざま人と農作業を通じた交流を育むうち、江面さん夫婦の意識に変化が生ま



常時雇用の従業員（写真前段中央）と大阪からボランティアに来ていた大学生（前段左右）と江面さん

れた。人との出会いが決して多くない農村の暮らしにおいて、人を受け入れ、農業に触れてもらうようにすることこそ、自分たちがしなかったことなのではないか。

本格的にホームページを通じて募集を開始すると、大学生を中心に応募が増加。現在は数百人もがエントリーするようになり、そのなかから年間約70人（コロナ禍以降

は、長期滞在可能な人を中心に約20人）を選考しているというから驚きだ。住み込みボランティアを通じて、えづらファームにかかわった人は延べ600人に上る。

北海道に住んでみたいと「おためし移住」する人や、食品企業への就職を考えていて、まず現場を見てみたいという学生など、来る人のニーズはさまざま。そして、来た

人はみな、名残を惜しみつつ「えづらファームに来てよかった」と口をそろえるように言って帰っていく。

その秘密は、江面さん夫婦が、来てくれる人それぞれの「えづらファームに来たい理由」「滞在中にしたいこと」を事前にきちんと聞き取り、そのニーズに沿ったプログラムを提供してくれることにある。

例えば、先の食品企業への就職をめざしている学生に対しては、収穫作業をしながら、野菜がこれからのようなルートで食卓へ届けられるのかを説明したり、原料加工の現場を見てもらったりするなど、きめ細やかなフォローを実施しているのだ。それが高い満足度につながり、口コミなどによって、新たな応募者の獲得にもつながっている。

情報発信がカギ

さらに、「農家民宿えづらファーム」として一棟貸ステイを提供する、農泊事業もおこなっている。空き家を改築し、1泊素泊まり価格は1人6000円（6〜15歳は半額、6歳未満は無料）。宿泊者はバーベキューをしたり、農場で採れた野菜でピザを焼いたりすることができ。また、農場体験も用意さ

れており、野菜の収穫のほか、夏は軽トラの荷台でビニールプール、冬はかまくら作りなど気候を生かしたものも数多い。コロナ以前は世界中から年間500人以上が宿泊に訪れており、住み込みボランティアと合わせると、えづらファームの年間交流人口は白滝地域の人口に並ぶという。

これらのユニークな取り組みは、ただ実施するだけでなく、積極的な情報発信によってさらなる波及効果を生んでいる。前述のブログだけでなく、農場紹介の動画公開、ジャガイモ畑へのオンラインツアー、さらにはホームページの検索順位を上げるための対策までおこなうことで、世界中にえづらファームの存在を知ってもらい、その魅力を発信し、新たなファンを獲得することに成功しているのだ。

「農業はもっとオープンであるべきだし、意欲のある新しい人がどんどん入ってくるべきだ」という江面さん。その理念を、さまざまな努力や工夫によって有言実行している。えづらファームは、生産・交流・情報発信の拠点として、その輪を少しずつ、大きく広げていく。

（編集部 大谷 香織／文
河野 千年／撮影）